

小学校教育における「短歌づくり」の可能性 I

—学校経営の視点からの一考察—

船 水 周*

Possibility of "Tanka making" in elementary school education I
—A consideration from the perspective of school management—

Hiroshi FUNAMIZU*

Key words : 想像力 imagination
定型 fixed form
歌集 anthology
表現 expression
理解 understanding

1 小学校国語科における短歌づくり

2011年4月から実施された、現小学校学習指導要領（国語編）は、「伝統的な言語文化と国語の特質に関する事項」の設定により、短歌学習に取り組みやすい状況をつくりだした。

例えば、中学年では音読、暗唱、作歌が短歌の取り組みとしてあげられている。^(注1)

それまでの短歌学習は高学年の国語教科書に掲載された短歌を理解させるだけで、つくるまでは求めていなかった。仮につくったとしても、高学年で1、2回体験する程度で終わっていた。これは短歌という伝統文芸が小学生に敷居が高いと考えられていた証左である。

同じ伝統文芸の俳句が五七五の十七音であるのに対して、短歌は五七五七七の三十一音である。俳句の五七五にさらに七七の音数がつけ加わるため、俳句をつくることよりもむずかしいとされていた。だから低学年に短歌をつくらせるなど、考えもしない。俳句と比べると、短歌の馴染みのなさは、はっきりしている。

しかし、実際に子どもたちに短歌をつくらせてみると、それが全くの誤解であることがわかる。短歌に対する考え方を少し変え、つくり方を工夫

すれば、低学年の子どもでも無理なく楽しくつくることできる。その根拠として、短歌は俳句に必要とされる季語や切れ字のきまりがない。唯一守るべききまりは五七五七七の定型である。学校生活、家庭生活で得た発見や気づき、思いを三十一音の形式に自由にまとめるだけだ。短歌は俳句よりもきまりが少ないうえに、俳句よりも多い、七七の音数が逆に表現の幅を広げる。

別の見方をすれば、小学生がつくる短歌は、「定型の短作文」と捉えることができる。「定型の短作文」の意識をいかにもたせるか。それができれば、短歌づくりは急に敷居が低くなる。気軽に、より自由に取り組めるようになる。しかも、五七の音数にまとめるために、指折り数えて言葉を探し、日本語の底に流れる五音七音の調べ（リズム）を自然に体得できる。小学生の短歌づくりには、こうした可能性が内包されている。

短歌づくりをとおして、小学校で学ぶ、1年生から6年生までの全児童に「自分の思いを自由に表現する力」をしっかりと育てる。当初は慣れない定型にまとめるため、どの子どももかなり苦労するように見える。ところが、慣れるにしたがって、低学年でも「短歌ならつくれる」「短歌ならつくれそうだ」という子どもが増える。定型に馴染めば、そのような子どもが現れてくる。

* 東北女子大学

短歌の特質は散文と比べるとよくわかる。理由は短い表現、三十一音の音数にある。それが互いの作品を短時間で一覧し、理解と表現を往還させ、伝え合うことを可能にする。

2020年から完全実施される新小学校学習指導要領（国語編）では、第5学年及び第6学年の内容2〔思考力、判断力、表現力等〕B 書くことの言語活動例イとして「短歌や俳句をつくるなど、感じたことや想像したことを書く活動」をあげて、以下のように解説する。^(注2)

短歌や俳句については、第3学年及び第4学年の〔知識及び技能〕の(3)「ア 易しい文語調の短歌や俳句を音読したり暗唱したりするなどして、言葉の響きやリズムに親しむこと。」において取り上げている。これを踏まえ、第5学年及び第6学年においては、伝統的な定型詩の特徴を生かした創作を行うことによって、七音五音を中心とする言葉の調子やリズムに親しみ、凝縮した表現によって創作する活動として例示している。

本稿では、筆者が校長として、「短歌づくり」を学校経営に取り入れた、平川市立金田小学校での研究実践（2010年～2015年）をもとに、小学校段階における「短歌づくり」の可能性について考察する。

2 小学生に短歌づくりをさせる意義

「なぜ小学生に短歌をつくらせるのか」

この問いに筆者はこう答える。

その時々思いや心の揺れ^(注3)（喜怒哀楽）を五七五七七（三十一音）の定型にまとめるのが短歌である。気持ちや気分は常に変化している。

短歌はそうした心の動きが消えないうちに文字化し、気持ちや気分をよそう（時々心の揺れを盛る）器である。指折り数えて、五七五七七の定型に言葉をはめ込む行為は、慣れないうちは不自由だが、この定型がリズムを生む。三十一音の器に盛るべき音数が限られるからこそ、適切な言葉を選び、どのような表現にするかを工夫しなければ

ならない。つまり、短歌は五句三十一音で構成される定型詩であるために、音数が限られ、伝えたいことをくわしく説明できない。

逆にいえば、それは弱みであると同時に強みになる。説明が省略されているからこそ読み手は作者の伏せられた思いを想像する。五音、七音の定型がリズムを生み出し、暗唱を可能にする。これが短歌の特徴である。

以上のことから、小学生に短歌をつくらせる意味は次の3つになる。

(1) 定型感覚が身につく

○五音七音が生み出すリズムを楽しむ。

○定型に言葉を嵌め込む意識をもつ。

(2) 観点（見方や考え方）が身につく

○さまざまな観点から物事を見る。

○五感を使って観察し本質をとらえる。

(3) 言葉を選び表現を工夫する習慣がつく

○様子がわかるように描写する。

○読み手の立場にたつ。

短歌には、俳句にある季語や切れ字がない。唯一の条件は三十一音の定型だけである。詠む対象は何でもよい。どう表現してもかまわない。自由である。ただし、抒情が伴わなければ短歌にはならず、単なる報告にすぎなくなる。

他の文芸と同様に、短歌も読者の参加を得て、はじめて完結する。一首に織り込まれた作者の言葉、表現をどう読み取るかが欠かせない。短歌は作者と読者の相互交流で成り立つ。これはコミュニケーションの本質であり、小学生に最も気づかせたい点である。

表現と理解の相互関係を理解させるのに、短歌づくりほど最適な方法はない。なぜなら、一首の解釈は読者に委ねられ、読者の知識や経験のレベル次第で、読みは狭くも広くも、浅くも深くもなるからだ。それは短歌を読む醍醐味でもある。

短歌づくりの要諦は作者が気持ちや気分を説明しすぎず、読者に想像させる余地を残すことだ。

短歌づくりに取り組むと、学校教育全体へ波及

効果が現れ、やがて校風としてしっかり根付いていくようになる。

3 全校体制で取り組む短歌づくり

筆者が主導した平川市立金田小学校の短歌づくりは、2010年から2015年までの5年間である。

子どもたちに短歌指導を始める前にまず教職員向けの短歌教室(ミニ歌会)を開催した。理由は、短歌をつくった経験がない教職員が多く、外部から歌人を招いて、講義と演習をしてもらう必要性を強く感じたからである。

教職員向けの短歌教室は、初めての教職員に短歌指導の見通しをもたせ、指導の不安を解消してくれた。担任は短歌教室で学んだ短歌のつくり方をもとに、それぞれの学級(14学級:304名)で短歌づくりを開始した。

短歌づくりの指導は当初、国語科や総合的な学習の時間の中で行っていたが、慣れるにしたがって、他教科の授業や家庭学習、休業中の課題としてもつくらせるようになった。限られた授業時間の中で、短歌により主体的に向き合うために必要な措置であった。

学級担任が短歌づくりで共通に認識すべき事項として次の4つを設定した。

- (1) 短歌づくりのルールは、原則、定型(五七五七七の五句三十一音)を守るだけであること。
- (2) 「字余り」「字足らず」に神経質にならず、自由につくらせること。
- (3) さまざまな機会をとらえて、できるだけたくさんつくらせること。
- (4) 全校歌詠み大会での発表や各種短歌大会へ応募すること。

最初は表現のよしあしを問題にしない。三十一音の定型に言葉を嵌めることができれば、それでよしとした。定型に慣れるにしたがい、読み手がつくり手の気持ちを想像できるようにするため、「うれしい」「楽しい」「悲しい」などの言葉(形容

詞)をできるだけ使わないように指導した。

短歌の題材は学校行事でテーマを決めてつくる以外、何を取り上げてよいことにした。学校や家庭で感動したこと、発見したこと、思ったことを具体的な言葉で自由に表現させた。

ただし、短歌をつくる意欲を高め、作品のレベルをあげるためには、つくらせたままにしない。自分以外の友だちがどのような作品をつくり、どんな工夫をしているかを知る必要がある。その意味では子どもたちの短歌作品を相互交流させる場を設定することが絶対に欠かせない。

友だちがつくった短歌作品からは、いろいろな見方や考え方が受け取れる。どうしてこのような表現をしたのか、受け取る側が作品の表現からあれこれ想像できる。そして相手へ感じたことを適切に伝えることができれば、逆に自分の作品についても認めてもらえるようになる。

短歌は散文と違い、短い詩型である。そのため、一瞬で一覧でき、読むのに時間がかからない。学級全員の作品に目をとおすことも、さほどむずかしくない。

4 短歌づくりで学ぶ表現の基礎・基本

(1) 音数の数え方を覚える

定型に合わせる言葉は音数で数える。文字数ではない。例外もあるが、五十音は原則一字一音で数える。短歌をつくるときは、定型に合わせるために音数を指折り数える。それで、知らぬ間に音数の数え方が自然に身につくようになる。

大人、子どもに限らず、短歌や俳句、川柳など、短詩型に挑戦し始めた頃は、定型に納めることに苦勞する。しかし、次のような覚え方をすれば、音数を数えるのに便利である。この覚え方は、低学年にとって格好の言語教材になる。

<チューリップを使った覚え方> (注4)

「チュ」…「キャ」「キュ」「シュ」など、小さい「ヤ」「ユ」「ヨ」を含む拗音は一音。

「ー」……「サーカス」「コート」「おかあさん」など、長音「ー」「あ」は一音。

「リ」…… 普通に一音。撥音「ん」も一音。
 「ッ」…… 「かっぱ」「カット」「きっと」など、促音「っ」「ッ」は一音。
 「プ」…… 普通に一音。

(2) 相手意識をもち、経験や思いを伝える

短歌は自分の思いや気持ちを伝える定型詩である。読み手にそれがしっかりと伝わらなければならぬ。と、相手（他人）に伝わるかどうかは簡単ではない。想像以上にむずかしいものである。これは短歌づくりに限らない。表現の際に常につきまとう問題である。

小学校段階で短歌づくりをさせるメリットは、言語表現の基礎・基本に早くから気づかせることができる点にある。子どもたちに短歌づくりを指導する際は、次の3つに留意する。

①表現する対象を絞り込む

伝えたい思いや気持ちを具体的に表現（描写）すれば、臨場感が生まれ読者に届く。

どこに焦点をあて何を切り取るか。何を選び何を捨てるか（何を書き何を書かないか）。これは表現に欠かせない演出となる。そして、さまざまなものの見方、考え方があつてに気づかせる。

上から見る。下から見る。横から見る。斜めから見る。近づいて見る。離れて見る。拡大して見る。縮小して見る。何かに見立てる。擬人化する。変形して見る。そのまま見る。

このように視点を変えて対象を観察する。ここぞと思う部分を描写し、他は思い切って省略する。そうすることで場面が動き出し、つくり手の思いや気持ちが伝わってくる。

②ムダな言葉がないか検討する

短歌は限られた音数である。五句三十一音にムダな言葉がないか。他の言葉と響き合うか。定型に収まってもそれで終わりではない。短歌として成立しているかどうか。まず声に出して読む。そして考える。一首のリズムはどうか。その言葉でいいか、他に言い換えはできないか。語順はそのままでもいいか。それとも入れ替えた方がいいか。さまざま検討してみる。

③読み手が想像できる余地を残す

ある事象（対象）を詠む場合は、できるだけ体験をさせるようにしたい。なぜなら、具体的に描くには事象（対象）を観察し、五感（目・耳・鼻・口・皮膚）を使って質感を捉えなければ、表現しにくいからである。

実際、頭だけでつくるのはむずかしい。漠然と知っていること、知っていること、人から聞いたことだけでつくと、事実を歪めたり見落としたりしてリアリティーが感じられない歌になる。思い込みや先入観が幅をきかせるからだ。

また、表面的なとらえ方や常識的な見方、考え方には自分なりの発見、気づきがない。

事象に即した具体的な言葉（数詞、固有名詞）は読み人の心に響きやすいが、手垢のついた抽象的な言葉は読み手に想像させる余地がない。説明しすぎるからだ。これでは読もうとする意欲が起らない。自分で見つけた事実や発見、気づきは、どんなにささやかなものでも、かけがえがない。

(3) 基本の技法を自分の表現に活かす

短歌づくりを頓挫させる最大の敵はマンネリ化である。どうしても同じパターンの作品が多くなり、創作意欲がしぼんでしまう。短歌をつくり続けるには、それを打ち破る必要がある。

比喩（見立て・擬人法）やオノマトペ（擬音語・擬態語）、リフレインの技法は、そのようなとき、一味違った短歌へ変えていくのに役立つ。

①比喩

読み手とイメージをしっかりと共有できるたとえ（見立て・擬人法）がよい。ただし慣用句的表現は新鮮さや発見が見られず、読み手の心に届かないので、できるだけ使わないようにしたい。例えば、「もみじのような手」「りんごのようなほっぺ」などの表現である。

②オノマトペ

オノマトペは物音や音声を言葉で表現したものである。うまく使えば、作品に細やかな雰囲気やリズム感、面白さが出せる。ただし、どんな使い方をして、それが読み手に伝わらなければ意味がない。オノマトペの効果がよくわかる工夫をし

たい。例えば、説明的な言葉はオノマトペにすると雰囲気やリズム感が出やすくなる。

③リフレイン

リフレインは詩や音楽でも使われる。句や節をくり返すことでリズム感が生まれ（調子が整えられ）、行動や心情が強調されて情景が味わい深くなる。ただし安易に使うと逆効果になる。限られた短歌の音数をムダにしてしまうからだ。

5 表現と理解を往還させる手立て

(1) 学校行事歌集を編む

①修学旅行歌集／自然体験学習歌集^(注5)

毎年、6学年担任に依頼するのは、旅行後に「修学旅行歌集」を編むため、子どもたちに2泊3日の修学旅行（感動・発見・気づき）を短歌（5首程度）にまとめさせることである。「気づいたこと」「楽しかったこと」「苦労したこと」「つらかったこと」など、五感をとおして捉えた事象を自分の言葉で表現してほしいからだ。

同じ景色でもカメラで写すのとでは味わいが違う。目の前の対象に向き合い、感動を短歌という器に盛る体験は、自分なりの見方や考え方、表現力・想像力を育てることにつながっていく。

同様に毎年、5学年担任には、「自然体験学習歌集」の編集に協力を依頼した。

両学年とも行事後に、それぞれの体験をもとにつくった短歌を全校児童の前で堂々と発表した。

【作品例】

〈修学旅行歌集〉

五稜郭名前のとおり五角形

見方によってはカメのしっぽ（三崎そよ栞）

買い物でどれにしようか迷ったよ

これもいいなあっちもすごい（北澤雄基）

〈自然体験学習歌集〉

山道をどんどんいくと見えてきた

全員とまるしせつ見あげる（葛西睦樹）

野菜切りみんなで作る昼ごはん

カレーライスは特別な味（小野菜々海）

②全校歌集^(注6)

毎年、全児童が1年間につくった短歌の中から

1首を選び、全校歌集に掲載する。歌集は、全児童、地域関係者、関係機関等に配布している。

(2) 短歌大会に参加する

①全校歌詠み大会

友だちの歌の背景を想像したり工夫点を学んだりするのが目的である。年2回開催している。

ア 各学級代表2名が全校児童の前で自作短歌を2回音読。（拡大コピーした短歌作品を全校児童が見える位置に掲示）

イ 短歌発表後、フロアの児童が感想を発表。

ウ 大会終了後、発表作品を廊下に掲示。

②各種短歌大会

「東奥少年少女文芸大会短歌の部」^(注7)「NHK全国短歌大会ジュニアの部」^(注8)に応募する。

【上位入賞作品例】天位：1席 地位：2席 人位：3席
第2回東奥少年少女文芸大会（2010 東奥日報社）
短歌の部 小学校1～3年

人位 いもうととテレビを見たよおわらいのわたしはわらったいもうとおどったよ

（2年 佐藤優実）

第3回東奥少年少女文芸大会（2011 東奥日報社）
短歌の部 小学校1～3年

天位 よさこいにおどりくるったはっぴょう会
きらきら光るみんなのえ顔

（2年 白戸聖也）

地位 初もうでパパと二人でころんでねおねがいごとをわすれちゃった

（2年 門間大和）

第4回東奥少年少女文芸大会（2011 東奥日報社）
短歌の部 小学校1～3年

人位 おぼんにねおがみに行くよおばあちゃん
としゃしんの中のおじいちゃんにね

（2年 上田和佳）

第5回東奥少年少女文芸大会（2012 東奥日報社）
短歌の部 小学校1～3年

地位 天まどにこんばんはするお月さま今日は
つもった雪で見えない

（2年 土岐穂乃花）

人位 すごいなあじいのくらははたくさんの昔
のうきぐねむっていたよ

（3年 白戸聖也）

第6回東奥少年少女文芸大会 (2012 東奥日報社)

短歌の部 小学校1～3年

天位 朝マラソン夏のおいをすいながら走って
いくよ青空の下

(3年 石澤樹佳)

地位 ねころんでみあげたはなびつぎつぎとふ
ってきそうですこしどきどき

(1年 工藤瑚子)

短歌の部 小学校4～6年

天位 暗い夜空に直線のぼったらバーンとひら
く夏のたんぽぽ

(6年 中田沙季)

第7回東奥少年少女文芸大会 (2013 東奥日報社)

短歌の部 小学校1～3年

天位 風あたるたくさんほした家のかき顔がし
わしわおじいちゃんだよ

(3年 佐藤磨宙)

人位 ゆきつもりごはんをたべたらかたづけだ
ちちがとぼしてほくがよせるぞ

(2年 五十嵐善郎)

短歌の部 小学校4～6年

地位 そりにのせ雪かたづけにせいを出し川に
流れる雪を見送る

(5年 中田湧大)

人位 せまい道車がくると雪かべに友達とピタ
忍者になるよ

(5年 小野佳斗)

第8回東奥少年少女文芸大会 (2013 東奥日報社)

短歌の部 小学校1～3年

地位 じてん車で走ると風がふいてくる春のに
おいがたくさんするよ

(3年 木村美麗)

第9回東奥少年少女文芸大会 (2014 東奥日報社)

短歌の部 小学校1～3年

天位 ねりあめをたべながらかくたかんだよ
べろべろべろんうたができたよ

(1年 盛 奏)

第10回東奥少年少女文芸大会 (2014 東奥日報社)

短歌の部 小学校1～3年

天位 リコーダーみんなの音色かなでられ息は

あったかいみんなの気持ち

(3年 對馬穂香)

地位 おぼんにはじいをむかえるだいじな火も
えろよもえろおもいでみえる

(2年 西谷 悠)

第11回東奥少年少女文芸大会 (2015 東奥日報社)

短歌の部 小学校1～3年

天位 とおいほしそらのうえまでとどくかな
あたらしいちずつくってみたい

(2年 木村恒心)

地位 ねぶたの日ぼくのむらにはりゅうがいる
かつぎねぶたがあばれていたよ

(2年 葛西修季)

人位 雪かきに雪がつもるよたいへんだ
外でやるから寒いだよな

(3年 下山陸斗)

短歌の部 小学校4～6年

地位 やっと来た版画の季節に私いるカリガリ
音たて今年をほるよ

(6年 市川優那)

平成22年度NHK全国大短歌大会ジュニアの部

選者賞 青森県平川市立金田小学校

超うまい高級ホテルの夕食は

六年生が食べていいのかな

(6年 工藤康平)

平成23年度NHK全国大短歌大会ジュニアの部

大会大賞 青森県平川市立金田小学校

ヤーヤドーねぶたまつりだおおねぶた

あせがおでこにジュースがうまい

(1年 山口愛永)

平成24年度NHK全国大短歌大会ジュニアの部

大会大賞 青森県平川市立金田小学校

てづくりのおもちきれいなねたべるのが

かわいそうだよおいしかったよ

(1年 大里陽芽乃)

6 短歌づくりを楽しませる手立て

(1) 瞬間を切り取って短歌にする

短歌はその瞬間の感情を表す。長い時間の感情

ではない。そのとき感じた、瞬間的な思いや気持ちをまとめる。だから、感情が宿っていなければ、歌にならない。日常生活には歌にできる場面がたくさんある。見る・聞く・触る・味わう。自分の感覚で捉えたことを歌の形にしていく。

(2) みんながつくり、みんなで鑑賞する

一人一人が短歌をつくり、一首一首の詠まれた状況をみんなで想像する。いいところを探して褒め合う。興味や関心がなくても、やってみたら面白い、感動したということがある。不思議なことに今まで気づかなかった心の動きが、五七五七七の形にまとめてはじめてわかるようになる。

(3) 短歌を「問」と「答」のパーツでつくる^(注9)

短歌は五七五の上の句と、七七の下の句の2つの部分でできている。上の句で風景を、下の句で作者の気持ちを詠み込む形が基本である。

上の句を「問」、下の句を「答」ととらえ、短歌は「問」と「答」で成り立つとする説もある。つまり、上の句「問」と下の句「答」を別々につくり、2つ合体させれば一首ができあがる。

(4) 「学校だより」「学級だより」で紹介する

各種短歌大会で入賞した作品を「学校だより」で紹介する。また、折々につくった短歌を「学級だより」にコメントをつけて掲載する。

7 全校体制による短歌づくりの成果と課題

短歌づくりを始めた頃、低学年では、短歌形式で表現することに戸惑う子どもがいた。

ところが、短歌づくりを重ねるうちに、作歌に対する抵抗感がなくなり、逆に短歌ならつくれるという子どもが増えていく。

実際、子どもたちの短歌作品を見ると、自由でのびのびと表現している。それは各種短歌大会で入賞した作品の質や保護者、地域住民、関係機関の評価でも裏付けられた。全校体制による短歌づくりの成果と課題は次のとおりである。

【成果】

(1) 「東奥日報社東奥少年少女文芸大会」短歌部門において、2010年から2015年まで(年2回開催)、毎回多数の入賞者を出した。

また、「NHK全国短歌大会ジュニアの部」においても、2010年から2015年まで(年1回開催)、大会大賞2回、選者賞1回を含む入賞者を出し、NHKから平成24年度、26年度に短歌部門で学校特別賞を受賞した。

(2) 全校で短歌づくりに取り組むうちに、俳句や川柳にも挑戦する学級や子ども(個人)が出てきた。また、それが各短詩型文芸の特徴や違いに気づかせ、七五調、五七調のリズムに馴染ませる要因になった。

(3) 学校の教育活動(授業・行事)で体験した、さまざまな思いや気持ちを短歌のフォーム(型)に仕立てる工夫が感じられるようになった。

予想以上に早く成果をあげたのは、全校体制で児童全員に短歌をつくらせたことや短歌を五七五七七仕立ての「定型作文」として自由につくらせたことが大きい。

学校経営の柱として、全校体制で短歌づくりに取り組む根拠となったのは、現学習指導要領(平成20年告示)である。国語科の目標は、「伝統文化に触れ、美しい言葉や感性を身に付けること」と明示され、短歌づくりを全校体制で推進するうえで、格好の追い風(アクセル)になった。

また、教育委員会など、関係機関の後援や各種団体が主催する文芸大会の開催が増えてきたことも後押しになった。これを入賞主義ではなく、もっと前向きにとらえ、学校教育(経営)の充実に活用していくように考えたことがよかった。

実践するうえで、最も大きな課題は、各種短歌大会への応募を誤解なく、説明することだった。

そのため、全職員、特に学級担任(14学級)には、きちんと納得してもらう必要があり、具体的に次の3つの理解に努めた。

(1) 各種短歌大会への応募は、児童の表現力に一層磨きをかけ、自信をもつ機会として活用するためである。したがって、できる範囲で、応募することを前提にする。応募作品は他人を中傷したり迷惑をかけたりしないかぎり(他の大会へ同一

作品で二重に応募しないなど)、原則どんな作品でも構わない。

(2) 短歌づくりが他の教育活動の妨げになったり、児童の負担過重になったりしないよう、短歌をつくる必然性に配慮する。そのためには、さまざまな教育活動と関連させたり、長期休業中の課題にしたりする工夫が必要になる。

(3) 各種短歌大会への応募、全校歌詠み大会(年2回)の開催、「自然体験学習歌集」「修学旅行歌集」「全校歌集」の発行を、年間スケジュールと校務分掌に位置づける。これは継続的にやり続けるうえで、絶対欠かせない条件になる。

表現力は絶えず表現と理解を往還し、推敲していくことで向上する。唯一絶対の方法はない。2、3回やった程度で身につくことはない。表現する機会を多く設定し、計画的、継続的に練習していくしかない。それがやがて質に転化する。地道なプロセスなしに、表現力がつくことはない。

【課題】

全校体制による短歌づくりは、子どもに短歌のフォーム(型)に親しませるうえで効果がある。

他方、短歌作品の質的な面では課題が残った。低・中学年に比較して、高学年の作品が画一的で典型的である点だ。これは短歌をつくらせるだけでは解決できない。

一般的に、小学校学習指導要領においては、どの子どもに対しても、その学年相応の表現力を身につけさせることをねらいとする。

これは単に表現するだけでは達成できない。表現力をより豊かにするためには、その支えとなる理解力の充実が欠かせない。

つまり、表現力をしっかりと身につけさせるには、言葉による見方・考え方(対象の切り取り方等)の指導とともに、読書で語彙を増やす取り組みが不可欠な要素となる。

小学校段階における短歌づくりは、子どもたちの表現意欲を向上させるうえで、極めて有効な方法である。しかし、それは表現力を向上させるためのきっかけ、始まりにすぎない。

短歌づくりは1つの表現活動である。だがそれは、学校の全教育活動に関連、反映できる可能性をもつ。2020年から本格実施される新小学校学習指導要領は、授業を改善し、活性化していく視点として「主体的・対話的で深い学び」を打ち出した。このような状況下で、全校体制による短歌づくりが果たす役割は決して小さくない。

【参考文献・資料】

栗木京子『短歌をつくろう』(岩波書店2010)
坊城俊樹・やすみりえ・東直子監修『俳句 川柳 短歌』(土屋書店2013)

岡井隆『岡井隆の短歌塾入門編』(角川書店2012)
船水周『短詩型に培う力』(青森地域文化活性化研究所2015)

注1 文部科学省『小学校学習指導要領(平成20年告示)解説国語編』(東洋館出版2008)

注2 文部科学省『小学校学習指導要領(平成29年告示)解説国語編』(東洋館出版2018)

注3 俵万智『短歌をよむ』(2012 岩波書店)

注4 小島健『はじめての俳句づくり』(学研教育出版2012)

注5 平川市立金田小学校『2014 自然体験学習・修学旅行合同歌集』(金田小学校2015)

注6 平川市立金田小学校『平成26年度 全校歌集「金田っ子」』(金田小学校2015)

注7 「東奥少年少女文芸大会」(主催 東奥日報社)
第2回(2010.10) 第3回(2011.2) 第4回(2011.10) 第5回(2012.2) 第6回(2012.10) 第7回(2013.2) 第8回(2013.10) 第9回(2014.2) 第10回(2014.10) 第11回(2015.2) 以上「東奥日報」朝刊に掲載。

注8 NHK全国短歌大会事務局『平成22年度NHK全国大短歌大会ジュニアの部入選作品集』(NHK・NHK学園2011) p.6

NHK全国短歌大会事務局『平成23年度NHK全国大短歌大会ジュニアの部入選作品集』(NHK・NHK学園2012) p.12

NHK全国短歌大会事務局『平成25年度NHK全国大短歌大会ジュニアの部入選作品集』(NHK・NHK学園2014) p.6

注9 安森敏隆『風呂で読む 短歌入門』(世界思想社1999)